

平和、生態系と大乘の精神

杜継文
菅野博史 訳

仏教はきわめて生命力のある宗教であると、私はずっと考えてきた。二千五百年以上の仏教の歴史的過程のすべてが、仏教の伝播と発展が武力の支持に基づかず、また国家の強制にも頼らず、仏教自身の組織の力にさえ依拠することがなかったことを物語っている。世界の諸大宗教のなかで、仏教のように緩やかな組織のものはほかにないのに、どうしてさらに仏教の組織の力を用いようとすることができようか。おそらくまたましくこのような原因によって、仏教は非常に脆弱に見える。釈尊は生存中、彼の種族を絶滅に遭うと

いう災いから免れるように守ることはできなかったし、中国仏教も「三武一宗」の破壊を阻止することはできず、さらに多くの地域と民族のなかで十分に発達したことのある仏教は、最終的にはその歴史遺跡が残るということさえ難しかったのである。

しかしながら、これらすべてはけっして仏教の発展の足取りを止めなかったし、仏教は現在まで依然として栄えており、東洋のいくつかの地域では復興し、西洋のいくつかの地域では新興している。その影響、特にその思想的影響は、信徒の範囲をはるかに超えて出

おり、数字で簡単に量ることはできない。私は、仏教がきわめて強い生命力を備えていることがその原因であると考えている。

私のいう生命力とは、けっして神秘的なものではない。簡単にいうと、人間に対する誠実でためまな思いやりである。しかも、時間と場所の相違にに応じて、人類を脅かし危害を及ぼす最大の問題や思いやりの最も必要な大衆を選んで、自己の関心の重点を決めることに優れていることである。それがただ人間に対する時間と場所に応じた思いやりからでありさえすれば、きつと仏教は生命力をもつにちがいない。このような生命力は、とりもなおさず菩薩行のことである。

一 神教から見ると、仏教は無神論である。仏教の根本教義は、神ではなく人間を第一位に見るからである。人間の活動が世界を創造し、また人間自身を創造する。世界の状況、人生の状況は結局、人間自身の活動の結果である。したがって、さまざまな疎外と解放の運動を含む人間のすべての活動は、ただ人間のためでなければならぬ。小乗仏教は、世界と人生の「苦」の面

を反映しているが、それは人間の「苦」からの解脱を、不可知の来世、あるいは彼岸の涅槃に置いた。人間に對するこの種の関心は、流行の言い方を用いると、「究極的関心」に属するものであるが、それは人間を現在に絶望させ、また現在を失わせてしまった。大乘仏教の興起の重要な原因は、この種の関心の悲観主義的な性質に不満をもち、普遍的な関心を提唱し、あわせて関心の重点を現実の人生に移し、積極的な世界観と人生観によってこれに取って代わることであった。仏教にはこの面の思想が非常に豊富であるが、現代の中国だけでも、「人生仏教」と「人間仏教」(中国語の「人間」は、日本語の「人間」という意味ではなく、人間の住む世界、現実の社会を意味する——訳者注)などの新しい主張が出現している。時代とともに歩むこのような思想の全体的目標は、人類の運命に関心をもち他のすべての人々とともに、幸福で素晴らしい人類の普遍的な世界を建設することである。このような理想のために精進して止まなければ、仏教は青春を永遠に保ち、自己の生命力を十分に示し發揮することができるはずである。

二十世紀は偉大な世紀であり、人類の文明はこれまでにこれほど高いレベルに達したことはなかった。労働者の勤労と科学技術の発展は、空前の社会的な富を創造し、先人が想像もしない、そして皆が享受できるさまざまな物質と精神の条件を提供した。しかし、まさしくこの二十世紀において二度の世界大戦が勃発し、そして今日まで局地戦争が絶えないことを、人々はまた永遠に忘れるべきではない。人類が生存のために頼るべき環境は、空前の破壊に遭い、また破壊はますます激しくなる趨勢にある。人類の創造活動、猛スピードで発展する科学技術、億万の人々の懸命な労働はでたらめに利用されて、人類自身を殺戮し、人類の生存の自然条件を破壊するのに用いられるようになった。これは文明の反動であり、野蠻の名残である。

人類はちょうど新世紀のスタートラインに立っているところであり、前世紀の経験と教訓をどのように反省し吸収するか、人類の生活がいつそうすばらしく幸福になることを保証するかが、二十一世紀の新しい文明を建設する重要な前提である。二十一世紀を予見す

る学者の数はきわめて多いが、その見方は百花斉放であり、さまざまなものが現われている。それらはすべて注目すべきではあるが、最も重要なことは戦争を制止し防止することと、環境を保護して生態系のバランスを取ることであると、私は考えている。戦争と環境は地球全体を脅かし、人類総体を脅かす問題であるからである。もしこの二大問題が解決できなければ、いわゆる文明の建設は空論となってしまうであろう。

私は二種の見方を聞いたことがある。一つは次のような見方である。「現在の世界的な罪惡は科学技術の発展に起因し、科学技術は人間の物欲を刺激し、社会の道徳を腐敗させる。科学技術は戦争の規模を拡大し、殺戮能力を増強する。科学技術は天から地まで、果ては人間の体まで、至る所に入り込んで自然の生態を破壊する」と。それゆえ、この種の見方は科学に反対し、理性を非難し、人々が自然に回帰し、原始に回帰するように呼びかける。しかし、私は、このような意見は因果関係を転倒させたものであると考える。人類のすべての文明は道具を使用し、道具を製造することがで

きるといふ基礎の上に建設され、科学技術はずっと文明の前進を促進する牽引車であった。本世紀は、科学技術がさらに速い速度で前進発展し、労働の生産率がさらに猛烈に上昇するであろう。これは必然的であり、抑制することはできない。反科学、反理性はただ時代に捨てられるだけで、ひいては社会から遊離してしまい、各種の想像もできない新しい苦難に遭遇するかもしれない。しかしながら、別の一面から見ると、この種の見方は、もし科学技術の業績と労働の成果とのでたらめな利用を有効にコントロールすることができなければ、人類が自ら絶滅するのと等しくなり、むしろ原始に回帰し、自然に回帰する方がまだましであると、非常に先鋭な形式で人々に警告する。したがって、新世紀の最も重要な事からは、科学技術を発展させ、科学技術のでたらめな利用を防止し制止することである。これはまず政治家に要求するものであるが、同時にまた我々全人類の責任でもある。

もう一つの見方は次のようである。「世界の衝突は避けられないので、戦争も避けられず、環境の破壊も避

けられない」と。避けることができないとする深層の原因は、世界の文化の多様性にあるといわれる。現象もまた確かに少しそのようである。地球は、この一つ、あの一つ、この文化、あの文化と区分され、そしてあるものは対立し、あるものは年中戦争している。ただ同じ国家のなかで常に文化・信仰の名目で暴力を使用するだけでなく、国と国との間で、ある国はまた自国の文化価値の優越性を、他国への干渉、圧迫、果ては侵略の口実としてしまう。したがって、この種の言いは前世紀に戦争を発動させるのに用いられたある種の世論を、人々にとても容易に連想させる。この種の世論は次のように述べる。「人種には優劣があり、文化には高低があり、優等な人種は劣等な人種を奴隷のように酷使し、『先進』の文化は『遅れた』文化を征服する。このことは生物学上の自然法則であるから、略奪にも、焼き殺すことにも、侵略にも道理がある」と。

現在の文化の衝突論者は、さらに範囲を拡大した。つまり、一般に文化の相違があれば、必然的に政治と軍事の衝突を起こすはずである、と。これが人々を戦

慄させるのも無理はない。当然、この種の論調の人がすべてファシスト主義と何らかの関係があるとは限らないし、いくつかはやはり一種の善意の警告かもしれない。しかし、これは確かに一種の危険信号を反映している。すなわち確かにある人は世界文化の多様性を利用して、文化の間の交流、相互扶助、調和という主要な傾向を故意に抹殺し、人々が「共生」共存できない程度にまで文化の相違を誇張し、混乱を作り出し、それによって利益を得ようとたくらんでいる。同様にまた自己の国家の価値観と政治理念を売り込む理由として。人類のすべての文明の歴史は、文化の相違性があつてはじめて文化の多様性があり、このこともまさしく人類の生活が豊富多彩でありうる前提であることを物語っている。文化もまた発展するものであり、いかなる民族、国家も、それがこの世界にまだ継続して存在し、さらに発展しようとするならば、その他の国家と民族の文化の影響を受け入れ、外来の文化によって自己を養い、自己を豊富にし、あわせてそれらの優秀な要素を自己の有機体のなかに取り入れる必要があり、またそうしなければならない。文化の閉鎖と専大は、自我の衰弱の前兆である。したがって、文化の差異とその多様性は、各国の人民が互いに交流し、互いに学習し、ともに繁栄幸福の道を歩む条件である。互いに敵視し暴力を行使する理由としてはならない。しかし、ここで依然として強調しなければならないことは、交流は自分から進んでするものであり、互いに他を利するものでなければならず、何を拒絶し、何を受け入れるかに対する決定権は、まったく当該の民族、国家自身にあるということである。この種の権利は、同様に神聖であり、干渉してはいけない。他人の文化と信仰に対する尊重は、また人類の創造に対する尊重でもあり、人類の尊厳を擁護する構成要素である。

宗教は世界の人口のなかで最も多い部分に影響するある種の文化形態であり、宗教は二十一世紀において多くの挑戦に直面してはいるが、戦争と生態系の問題は事ながら地球全体に関わり、すべての人々に関係している。特に重大な関心を示すべきである。仏教については、自己の固有の大乗の精神を十分に発

掘し発揚すれば、その他の社会の利益集団と比べられないほどの貢献をするかもしれない。

それでは、大乗の精神とは何か。詳しくいえば内容は非常に豊富であり、数編の論文でも完全に説き尽くすことはできないであろう。しかし、その精神すべてを含む核心について、私は一言で述べることができると考える。それはとりもなおさず衆生を守護し、利益することである。ブッダが模範として示した菩薩行は、純粹で完全に徹底した利他主義であり、衆生に周到な思いやりを示し、一々の生命の生活に保障を与え、そしてさらによく生きるようにさせる。仏教の十善は「不殺」を最初とし、仏教の「五戒」は「殺を戒める」ことを第一に挙げる。ことわざに「人間の一命を救うことは、七層の仏塔を作るよりすばらしい」という。これはすべて仏教の常識である。もし大乗仏教が一々の生命体に対して、すべて大慈悲の態度を取ることを要求するというならば、この種の精神を世界の平和を維持することにまで拡大し、全人類が戦争と暴力の塗炭の苦しみを受けるのを防止することは、大乗の精神

の当然の意義であるはずである。

仏教は生態系のバランスを擁護し、環境を浄化する方面において、特に優れた歴史、悠久の歴史をもっており、これはあらゆる伝統のなかで最も社会に広く賞賛される伝統であり、かつて古代の詩人、文士の靈感を啓発し、また今の環境保護の模範となるのに恥じない。これは大乗のなかのある種の万物靈魂論の傾向やある種の教理と関係があるかもしれない。私は最近、常に天台智者の「一念三千」についての意味を考えている。この「三千」が「三千大千（世界）」と異なる重要な区別は、後者はただ一種の世界図式にすぎないが、智者の「三千」は世界のバランスを強調しているというところである、と私は考える。はじめに人間と人間との間のバランスであり、また人間と環境との間のバランスもある。現代の仏教は、現代科学の成果を吸収し、仏教のバランスの理論を、一つの新しい水準に向上させ、同時に生態系のバランスを擁護する伝統を、全社会、全世界に及ぼす可能性がある。

大乗仏教の社会学的特色は、入世（出世、出世間の反

対語で、積極的に現実の世間、社会に参加すること——訳者注と出世を統一させることである。それは入世でなければならず、入世の目的はまたまったく世俗の私利を超え、政治の対立を超え、公平を守り、平等に社会の各種の異なる団体と連絡し、人間と人間との間、民族・国家の間の関係を調和させ、交流、理解、友好を促進させることができることにある。宗教自身についていうと、当面、宗教信仰の自由を堅持し、宗教の寛容の原則を堅持するほど重要な事からはほかにない。

創価学会は池田大作先生の指導のもとで、大乘の精神を発掘し発揚することにおいて、世人を注目させる業績を作り出した。池田先生自身は自ら努力実践し、地球全体をほとんどくまなく歩き、平和友好を提唱し、環境の保護を呼びかけ、東洋・西洋の各種の文化の代表と対話し、対話と交流を主張し、差別と敵対に対してこれを除去しこれに反対しているので、広く尊敬されている。中国と日本は特殊な歴史関係をもつ隣国であり、池田先生と創価学会は、中日の代々の友好、共生互利を提唱し、歴史の惨劇に再び陥ることを防止す

るために、誠意を尽くして努力する日本の友好勢力の一つである。このことはとりわけ我が国の仏教界と仏教研究者に熟知されているので、さらに特別な尊敬を受けているのである。ここで、私は池田先生と創価学会の同士に対して、もう一度敬意を表明したいと思う。会議の円満な成功を祈る。

(とけいぶん／中国社会科学学院世界宗教研究所元所長)
(訳・かんのひろし／創価大学教授・東洋哲学研究所研究員)